

市史講座ミニレポート

第6回「神々の国、出雲」を再考する（講師：森田喜久男先生）

はじめに、森田先生は、『出雲国風土記』の記述をもとに、出雲が「神国」であるという認識が少なくとも17世紀前半には存在していたことを示されました。ただ、古代からそのような認識が連綿と続くものであったかと問われると、古代出雲人の信仰の実態を検討しなくてはならず、そのような課題に取り組むうえで、松江は極めて貴重なフィールドであると説明されました。

まず、「神まつり」の空間についてお話をされました。出雲国造が祭る神である熊野大神と大国主神との関係は、かつては相對する存在に考えられていた時期もありましたが、そうではなく当初から補完し合う関係であったと話されました。さらに、「カンナビ」という言葉について考察されました。「カンナビ」とは「神が隠れこもる」空間ですが、その名称の全域が立ち入り禁止なのではなく、意宇郡の「神名樋野」では出雲国風土記に記される「真名井社」「末那為社」「山代社」の三つの社以外の場所には、人間の手が入っている可能性が高いと話されました。また、出雲国風土記では佐太神社が麓にあったと書かれている、秋鹿郡の「神名火山」（朝日山）についても触れられ、実際は佐太神社の背後の山は「弥山」と呼ばれる山だが、佐太神社を前方にして多久川沿いの平野部から朝日山を眺めると、その麓に佐太神社が位置するように見ることができるとある説明されました。これは、出雲国風土記の国引き神話に登場する「狭田の国」の人々にとって大切な信仰の山であり、神社であり、風土記の筆者はそのことを認識していたためだと示されました。

また、出雲国風土記には399の神社が記されましたが、島根郡の神社については、それがすべてではないとも話されました。さらに、風土記に見える神社については、その存在形態、信仰圏など極めて多様であるが、浦や浜など小地域の地名を冠する神社が、地域社会に生活する人々と密接にかかわってくるとも話されました。

二つ目に、仏教とのかかわりについてお話されました。出雲において建立された寺院で最も早いのが安来市の野方廃寺で、7世紀から8世紀初頭の建立とされ、全国の中でも仏教の伝播が遅い国ではないかという研究がありますが、本当にそうなのでしょうか。

そこで、出雲国風土記に記された寺院を見てみると、意宇郡山国郷には教昊寺というお寺があり、この寺に相当する遺跡が安来市にある野方廃寺跡と考えられています。ここから出土した軒先瓦に描かれたハスの文様が、鳥取県米子市淀江町の上淀廃寺から出土したものと同一タイプのものです。さらに、風土記には山城郷に「北新造院」と「南新造院」の二つの寺院があったことを記しています。これら「新造院」と呼ばれる寺院は、いまだ律令国家に寺として公認されていないが、公認されることを希望している寺院として書かれたのであろうと話されました。このうち「北新造院」に関係する遺跡である矢田町の来美廃寺からも上淀廃寺と同じタイプの文様の瓦や鴟尾（金堂や政庁の屋根の両端に飾られたもの）が出土しており、これらは瓦工人が移動して広めた、あるいは鴟尾のデザインが図案として広まったものであろうと話されました。

出雲は仏教の伝播が遅い地域ではなく、寺院の造営が遅れたとすれば、それは地域社会の意志ではなく、ヤマト王権や中央政府が出雲を「神々の国」に仕立て上げようとした結果ではないかと説明され、出雲において、仏教が重要な位置を占めた可能性を指摘されました。さらに、出雲においても「山寺」の存在が示すように奈良時代の段階で山間部における仏道修行が盛んに行われ、そして、山岳寺院を拠点とする仏教や神祇信仰などが他地域と同様、併存して存在しており、それらは統一されず多様な信仰として存在し、人々は時と処に応じて使い分けていたのではないかと話されました。

三つ目に、出雲国における写経事業と国分寺の造営についてお話されました。出雲国司であった石川年足は、在任中に数々の写経を行っていますが、年足個人の信仰心にとどまらず、天平 9 年（737）3 月の勅を受けて出雲国を挙げ、組織的に大般若経写経事業を推進しました。そして、このことが天平 13 年の国分寺創建の詔に引用されていることがわかっています。これによって、国分寺の創建それ自体は天平 13 年以前にさかのぼる可能性があり、出雲国においては全国に先駆けて国分寺の造営が始まり、石川年足がそれに深くかかわった可能性も否定できないと話されました。

これまで見てきたように、古代出雲の信仰は神祇信仰一色ではなく、仏教に対する信仰も広範囲にわたって広がっていたことが判明し、古代の出雲には多様な宗教文化が花開いており、またその受容力もあったのだらうと話されました。

最後に、出雲は従来言われていたような閉鎖的な空間ではなく、様々な宗教が入る余地のある、開放的な空間であり、このような出雲の歴史について学ぶことはこれからの日本、また世界の歩むべき道を考える際に大きな指針になるだらうと結ばれました。